

北糖本別 生産終了へ 芽室に委託も 北見と道南2体制移行
23年3月 ビート買い受け継続

2021年8月31日

北海道糖業（札幌市）は30日、道内生産拠点の本別製糖所（本別町勇足）の砂糖生産を2023年3月で終了すると発表した。北見製糖所（北見市）などに生産を集約、一部は日本甜菜製糖芽室製糖所（芽室町）に委託する方向。国内の砂糖消費量の減少などが要因。本別製糖所に搬入される原料ビートは引き続き北糖が買い受け、日甜委託も含めて販売も行う。本別製糖所は受け入れるビートの倉庫などとして継続するが、日甜芽室、ホクレン清水と並ぶビート糖生産拠点の「撤退」は、十勝農業や地元・本別町に衝撃を与えている。

北糖の砂糖生産体制は、北見製糖所と道南製糖所（伊達市）の2生産拠点体制に移行。本別製糖所の正社員55人のうち砂糖生産工程に関わる約30人は、他事業所への配置転換などで雇用を継続する。

耕作指導、原料用ビートの受け入れ、倉庫管理（製品出庫）などは今後も継続。本別製糖所で生産される砂糖、家畜飼料用のビートパルプ、糖蜜などの副産物製品は、23年10月から北見製糖所に集約、一部は日甜芽室に生産を委託する方向で協議を進める。

北糖は「国内の砂糖需要の減少など事業環境の急速な変化と、生産設備の老朽化に伴う苦渋の決断。砂糖生産体制の効率化を図り、ビート生産者や地域社会との共生を図りたい」（総務人事部）としている。

北糖の親会社のDM三井製糖ホールディングス（東京）と日本甜菜製糖（東京）も30日、資本業務提携契約（1月）に基づき「ビート糖の効率的生産体制構築に関する基本合意書」を締結したと発表した。

新型コロナウイルスで国内砂糖消費の減少に拍車が掛かる一方で、環太平洋連携協定（TPP）など国際競争が進展、ビート糖事業の採算を確保する観点で生産拠点の統合、効率化を図るとしている。

＜北海道糖業＞

1968年設立。佃公彦の漫画「ほのぼの君」のキャラクターを用いた「ほのぼの印」ブランドの砂糖を製造・販売している。本別製糖所は1962年、大日本製糖ビート糖部門製糖所として生産を開始。68年から北糖の製糖所として稼働している。2020年度の原料ビートの受け入れ量は約36万800トン、砂糖生産量は約5万7500トン。21年4月、三井製糖と大日本明治製糖が経営統合して発足したDM三井製糖ホールディングスのグループ会社。



2023年3月で砂糖生産を終了する北海道糖業本別製糖所

十勝産小麦 大豊作 26万1千トン 過去2番目
ホクレン見通し 品質「ほぼ1等級」

2021年11月17日

ホクレンが取り扱う2021年十勝産小麦は、前年比28.6%増の26万1,000トンになる見通しだ。4月以降の気温が平年より高く推移したほか、春先には適度に雨も降るなど、開花時期までの天候の良さもあり、過去2番目の多さの大豊作となると予想されている。収穫時期の天候もおおむね順調で、品質も1等級が多い状況だ。

ホクレン帯広支所によると、うどんなどに使われる中力の主力品種「きたほなみ」は24万2,000トン（昨年比27.4%増）、パンなどに使われる超強力品種「ゆめちから」は1万7,000トン（同比41.7%増）を見込む。

今年産は、6月までの間、平均気温が平年よりも高く、日照時間がかなり多いなど、開花期まで好天が続いたため受粉も良好に推移。粒の数が多く、豊作基調とみられ

ていた。

今夏の高湿少雨の影響も心配されたものの、実の太りに必要な光合成を促す日照時間は多い時期が続いたため、「懸念された細粒傾向にはならなかった」（帯広支所）とする。

また、1ヘクタール当たり取扱量は約7.1トン。過去最高の取扱量（28万1,000トン）だった15年（1ヘクタ